

《論説》 中学校の部活動問題を通して

教育関係者に問われることとは

昭和女子大学・専任講師 歌川 光一

1. 部活動問題とは

労働のあり方をめぐる「ブラック／ホワイト」の議論の高まりの中で、部活動顧問の多忙化を中心とした「部活動問題」が指摘され始めた。特に生徒、教員、保護者等の多くが半強制的に関与するとされる中学校の部活動問題がクローズアップされている。

教育社会学者の西島央は、ここ数年で社会問題化した部活動の問題点を、「①休養日がほとんど設定されていないこと、②教員の多忙状況の一因となっていること、③多くの中学校で全教員が部の顧問をしなければいけない場合があること、④多くの中学校で全生徒が部活動に所属することが義務づけられていること」等に整理している（西島 2017 : 26）。部活動問題は部活動顧問教員の多忙化以外の問題も明るみにしながら展開してきた。

改訂された『中学校学習指導要領』（2017年）「第1章総則第5 学校運営上の留意事項1 教育課程の改善と学校評価、教育課程外の活動との連携等」では、部活動について以下のよう規定されている。

ウ 教育課程外の学校教育活動と教育課程の関連が図られるように留意するものとする。
特に、生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化、科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等、学校教育が目指す資質・能力の育成に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること。その際、学校や地域の実態に応じ、地域の人々の協力、社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携などの運営上の工夫を行い、持続可能な運営体制が整えられるようにするものとする。

『中学校学習指導要領解説総則』（2017）には、「一定規模の地域単位で運営を支える体制を構築していくことが長期的には不可欠であることから、設置者等と連携しながら、学校や地域の実態に応じ、教員の勤務負担軽減の観点も考慮しつつ、部活動指導員等のスポーツや文化及び科学等にわたる指導者や地域の人々の協力、体育館や公民館などの社会教育施

設や地域のスポーツクラブといった社会教育関係団体等の各種団体との連携などの運営上の工夫を行うこと」とあり、教員の多忙化解消に一定の配慮が示されることとなった。

学術界においても、2017年12月27日に「部活動の研究の充実、発展を図ること」を目的とする「日本部活動学会」（会長：長沼豊）が設立されている（公式 HP <https://jaseca2017.jimdo.com/> 20180601 最終アクセス）。日本音楽教育学会編『音楽教育実践ジャーナル』（Vol.15）でも特集が組まれ、吹奏学部や合唱部のあり方について西島（2017）、新山王（2017）、岩崎（2017）等によって論点が整理されている。

2. 中学生の学校生活と部活動

実際に中学生の学校生活において部活動はどのような役割を果たし、吹奏楽部を含む「音楽系」の生徒は学校や学級においてどのような位置づけなのだろうか。

鈴木・歌川・金澤（2016）では、東京大学教育学部比較教育社会学コース・Benesse 教育研究開発センター編（2011）のデータを用い、神奈川県内の公立中学校2年生（2009年度時点）の学校生活の実態を、所属する部活動（「音楽系」…吹奏楽部、合唱部、音楽部など、「芸術系」…美術部、演劇部、書道部など、「その他文化系」…科学部、家庭部、生活部など、「武道系」…剣道部、柔道部、弓道部など、「個人競技系」…陸上部、水泳部、体操部など、「ラケット競技系部活動」…テニス部、卓球部、バドミントン部など、「球技系」…サッカー部、野球部、バスケットボール部、ソフトボール部などが該当する）との関連から明らかにしている。

その結果、部活動に力を入れてがんばっていると回答している生徒が多いのは、「男子・音楽系」「女子・武道系」「女子・音楽系」「男子・球技系」の部活動に所属している生徒である。一方、部活動へあまり力を入れてがんばっていると回答していないのは、「男子・芸術系」「女子・その他文化系」「女子・芸術系」「男子・その他文化系」である。男女ともに音楽系の部活は比較的部活動へのコミットメントが高く、芸術系の部活動は部活へのコミットメントがそれほど高くないという傾向がうかがえる（同上：109）。

各部活動の 카테고리ごとの部活動への満足度を確認すると 部活動に満足しているという回答が多いのは、「女子・音楽系」「女子・武道系」「男子・音楽系」「男子・球技系」などである。逆に満足していないのは、「男子・芸術系」「女子・その他文化系」「男子・その他文化系」「女子・芸術系」である（同上：109-110）。

先の部活動にコミットメントしている部活動の 카테고리と、部活動に満足している部活動の カテゴリは、傾向がほぼ一致しており、部活動へのコミットメントが高い部活動に所属しているほど、部活動に満足しやすい傾向があることが読み取れるということである（同上：110）。

「音楽系」について見てみると、「男子・音楽系」の特徴として、部活動に高くコミットメントしており、部活動への満足感が高かったとしても、必ずしも学校生活の満足感が高

いわけではない(同上:112-113)。「女子・音楽系」の特徴として、「女子・ラケット競技系」とともに、部活内の友人が多く、クラス内の友人が少ない。これらの部活に所属している生徒は、学級中心の交友関係を築いていることが考えられる(同上)。

3. 吹奏楽部の問題点

音楽系部活動について、学校生活の満足度や友人関係などについては男女差があるが、部活動へのコミットメントが高く満足している点においては共通している。

新山王によれば、中学校吹奏楽部が内包する問題に関連して、①生徒数減少や教員の減員という背景があってもなお学校や保護者にとって「既にあるからやめられない」状態になっている点、②教員による音楽学上不十分な指導や成果主義と生徒が望む音楽に関する成長のギャップ、③吹奏楽部を題材としつつも、必ずしも音楽的内容には深く触れていないメディア・コンテンツの影響力、④多様な経験の提供、音楽教育の格差解消、勝つための部活、生徒指導、道徳面での指導、経済・産業界からの期待等、目的が多様になっていること、⑤過熱化、⑥教師の多忙化、⑦顧問や外部指導者に求められる資質や能力の刷新、⑧活動内容に関するバランスの適正化、を挙げている(新山王 2017)。

先の部活動へのコミットメントの高さについては新山王(2017)も以下のように指摘している。

半ば強制的に長時間に亘って拘束されることが問題である。放課後の練習に加えて朝練が行われ、行事やコンクール前には昼練まで課されると言う。運動部の場合は、体力的限界や熱中症対策等から活動時間が制限されるが、吹奏楽部の場合は個人練習・パート練習・合奏を通して長時間活動し、土休日や夏休みには半日から丸一日練習することもある。本来、生徒の自主的かつ主体的な活動であるはずの部活動が、参加の自由度を奪われた上で「みんなでやる」という集団意識の下で事実上義務化していたり、協調性の下に部員同士が互いに同調圧力を掛け合ったりすることが問題であろう(新山王 2017: 40)。

自身が中学校で吹奏楽部だったという一ノ瀬(2017)も以下のように回想する。

卒業後、しばらくたってから、当時の吹奏楽部の仲間たちと会ったときに、「あのころは楽しかったね！感動したよね！」といった感想だけではなく、人間関係が非常にぎくしゃくし、険悪なムードになっていたことをあげて「あのころはみんなちょっとおかしくなっていたよね。つらかったよね」といった話もしていたことが忘れられません。みんなそれぞれに苦しみ、葛藤していたことを、卒業してからやっとわかり合うことができました。(一ノ瀬 2017: 13)

新山王は中学校吹奏楽部の今後について、①指導者も生徒も時間的な余裕を持って、冷静に音楽活動と向き合う、②外部指導者等を活用して指導者は専門的指導に余力を持ち、冷静な音楽指導を心がける、というポイントを示唆する（新山王 2017 : 37）。

吹奏楽部をめぐる別の問題点として、加藤ら（2017）は部活動にかかる金銭面に触れている。部活動全体の経費として、楽器のメンテナンス費、壊れた楽器の修理費、定期演奏会を行う市民ホールの使用料、パートごとの講師料、練習場所の使用料、大型楽器搬送のトラックのレンタル料、レンタル譜、楽譜台、コンクールの DVD 撮影代、衣装代、コンクールに参加するためのチケット代を含めた参加費が、生徒個人の負担として部費や合宿費のほかに、個人として楽器の消耗品代やお手入れ用品、パートごとの外部講師への謝礼等の個人負担や定期演奏会の際の個別の参加費が必要になるという（同上 : 54-55）。

4. 部活動問題の背景にある論点

部活動問題を受け西島は、「学校から部活動をなくして解決にするのではなく、学校教育というしくみに依存して成り立ってきた芸術やスポーツなどの文化的活動を、新たなかたちで成り立たせていくために、どういうしくみが考えられるのか、『人』と『金』をどうするのか」といった検討が必要だと述べている（西島 2017 : 36）。ここで問題となってくるのは行政がアマチュア芸術文化活動、平たく言えば「趣味」活動が主を占めている生涯学習をどのように意義づけていくかという点である。

日本においては、「趣味」と教育・学習のイメージが近接してきた歴史があり、教育行政、文化行政は趣味活動の振興に実態として深く関与しつつも、その位置づけに関しては関係者間でも共通理解のない状態が続いている（歌川 2015a,b）。部活動に関しては、その運営に関わる学校教育関連のヒト、カネ、時間等の多寡が目されがちだが、部活動を、子どもの趣味活動の保障に関わる問題と捉え返すのであれば、部活動問題の背景には趣味活動と（社会）教育・（生涯）学習の関係性をめぐる質的な問題が横たわっている。

部活動問題は、この問題に、①対象がキャリア意識形成の只中にある中高生であるからこそ鮮明化する、プロを目指す場合にその技術・能力はどこで培うべきなのか（≒誰が担うべきなのか）という問題、②場が学校であるからこそ生じる、「競争」の位置づけの難しさ（いわゆる「甲子園病」といわれるような勝利至上主義の問題が指摘される一方で、教員からすれば「競争」は特に困難校であるほど特別活動の実施や生徒指導上有効であるがゆえに、部活動の指導内容がその専門家になるには不十分である場合にも大会やコンクール等に参加するというような状態）、という二つの論点が上乘せされることで成り立ってしまっているとも読み替えられる。

学校教育関係者のみならず、官民の社会教育・生涯学習関係者、文化行政関係者、余暇・レジャー関係者などの関心を引きつつ議論を展開していく必要があるだろう。

【引用・参考文献】

- 加藤玲・新戸明・渡部真由・黒部真子・小野田正利（2017）「座談会 私たちも黙ってられない！吹奏楽部の実態（特集 ブラック部活(その3)）」『季刊教育法』（194）、pp.48-61.
- 一ノ瀬りの（2017）「吹奏楽部で体験してきたこと（特集 部活動の深い悩み）」『教育』（856）、pp.9-13.
- 岩崎洋一（2017）「学校教育における合唱部の実態とこれからの展望—児童・生徒が豊かな音楽を追求することを求めて—」『音楽教育実践ジャーナル』Vol.15、pp.45-50.
- 関朋昭（2017）「なぜ吹奏楽部は文化部なのか—運動部と文化部のダイコトミーに着目して」『紀要』11、pp.7-16.
- 関向央奈（2017）「学校教育における吹奏楽部の在り方—コンクールに対する意識を中心に」『釧路論集：北海道教育大学釧路校研究紀要』（49）、pp.37-46.
- 西島央（2017）「社会問題化した「部活動のあり方」に音楽教育はどう臨むのか—中学生及び中学校教員対象調査データの分析から—」『音楽教育実践ジャーナル』Vol.15、pp.26-36.
- 新山王政和（2017）「中学校吹奏楽部に関する8つの所感—時間的余裕と専門的指導に余力をもち冷静に音楽と向き合える場になることを願って—」『音楽教育実践ジャーナル』Vol.15、pp.37-44.
- 鈴木翔・歌川光一・金澤貴之（2016）「中学生における所属する部活動と他の学校生活の関連性の検討—中学2年生を対象とした質問紙調査の分析から—」『群馬大学教育実践研究』（33）、pp.107-114.
- 東京大学教育学部比較教育社会学コース・Benesse 教育研究開発センター編（2011）『神奈川県公立中学校の生徒と保護者に関する調査報告書』
- 歌川光一（2015a）「社会教育・生涯学習行政と地域アマチュア芸術文化活動」宮入恭平編著『発表会文化論—アマチュアの表現活動を問う—』青弓社、pp.67-90.
- （2015b）「社会教育・生涯学習実践として『趣味』をみる視点—その歴史と展望—」『社会教育』831、pp.20-25.